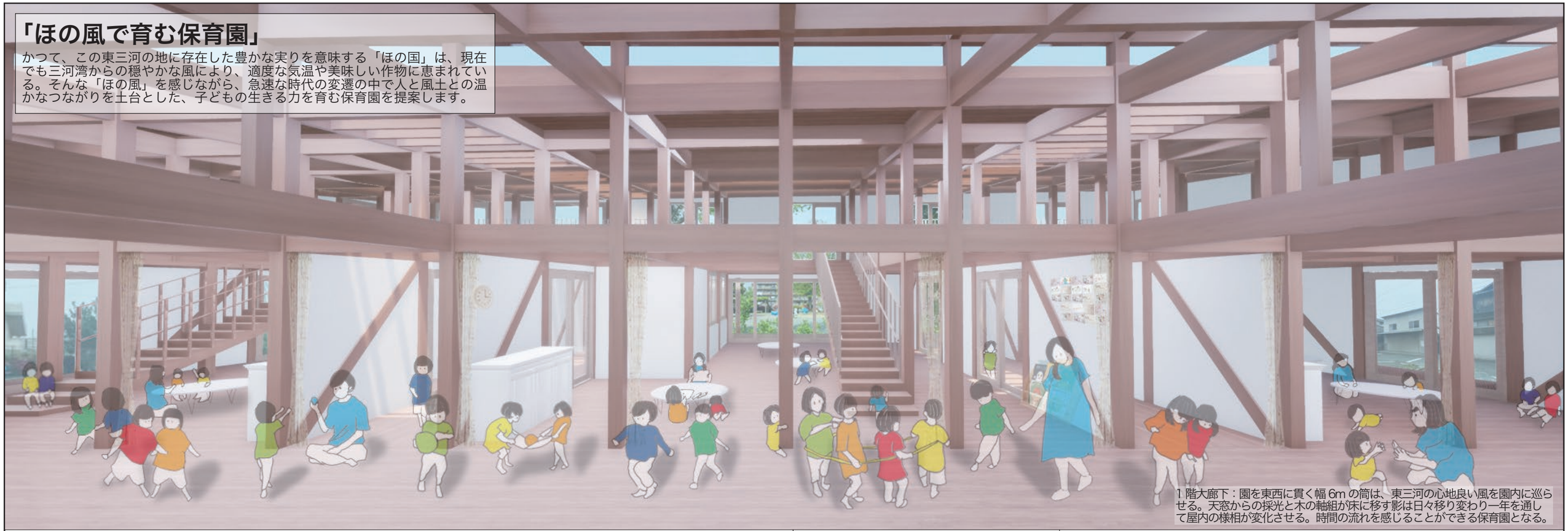
「ほの風で育む保育園」

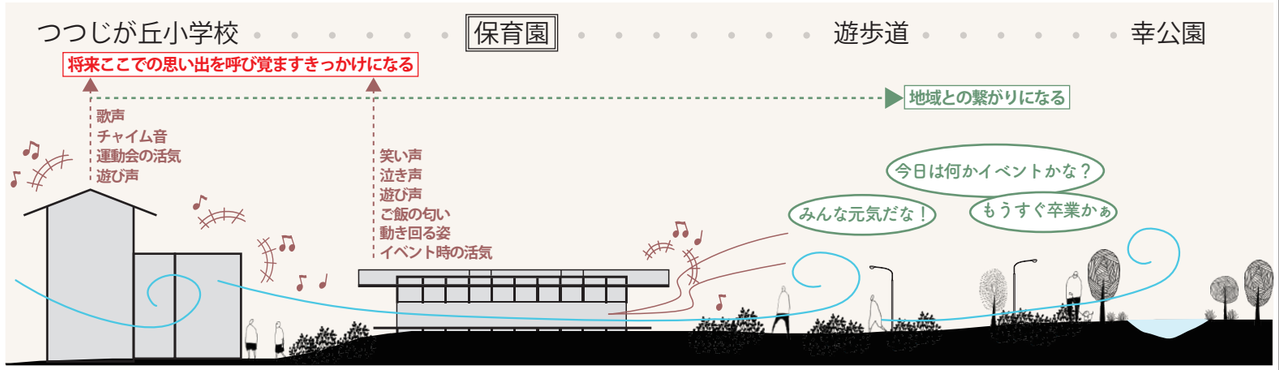
かつて、この東三河の地に存在した豊かな実りを意味する「ほの国」は、現在でも三河湾からの穏やかな風により、適度な気温や美味しい作物に恵まれている。そんな「ほの風」を感じながら、急速な時代の変遷の中で人と風土との温かなつながりを土台とした、子どもの生きる力を育む保育園を提案します。



1 階大廊下：園を東西に貫く幅 6m の筒は、東三河の心地良い風を園内に巡らせる。天窓からの採光と木の軸組が床に移す影は日々移り変わり一年を通して屋内の様相が変化させる。時間の流れを感じることができる保育園となる。

○東三河の風土でつくる、ここにしかない保育園

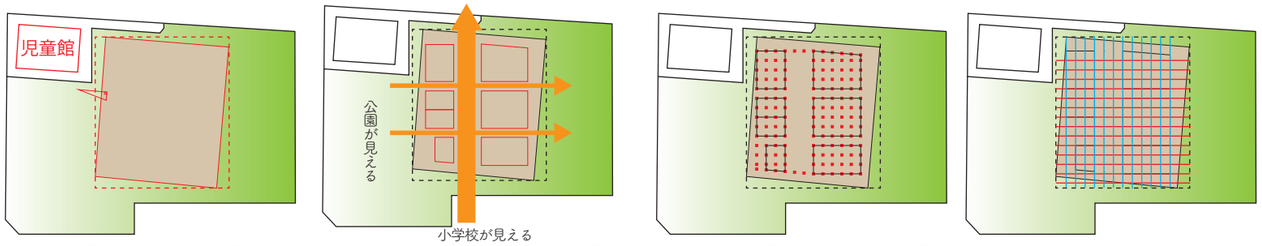
子どもたちにとって 2 歳までの期間は、感性的・身体的に成長著しい期間である。その大切な時間を地域の環境的な**風土 (光・風・水・天気・文化・風景)** を巻き込んで過ごすことで、この地域にしかない風を感じ、光を浴び、匂いを嗅ぎ、周辺の音に耳を澄ませる。この地域の**環境的要素**に、周辺の**雑音的要素**が付与されることで、町が一体となって保育園の**子どもを包み込むような場所**となる。



小学校から届く遊び声やチャイム音、保育園で発生した泣き声やご飯の匂いが西側からの風に乗り遊歩道の先まで届けられ、地域一体で子どもを見守る町となる。

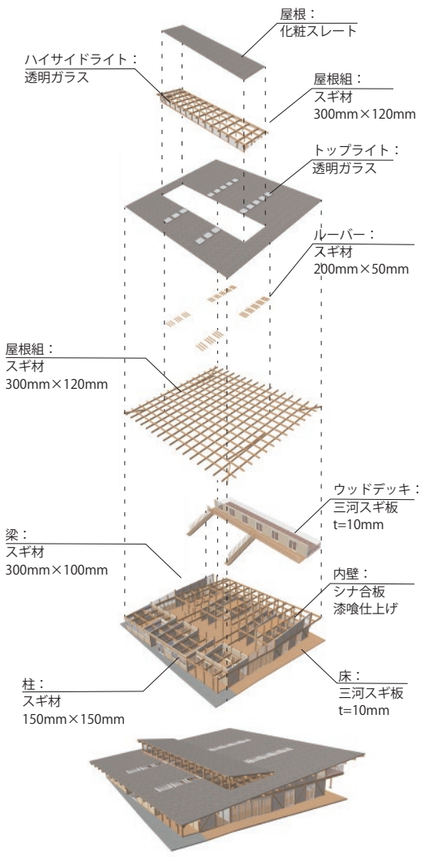
○シンプルな構成でつくる、子ども自身で過ごし方を発見する多様な場

本提案は、道路から児童館に合わせて**傾けたスラブ・道路に対して並行に配置した片流れ屋根・東西南北に貫く 3 本の廊下**で構成される。また、遊歩道の延長線上に**大廊下**を設けることで町との連続した関係性をつくった。この大廊下を軸としてグリッド状に柱を配置し屋根を支える梁を設置した。これにより、**奥行きのある連続した屋内空間**と**様々な居場所**をつくった。



1. スラブと屋根のズレが三角形の半屋外空間を 4 箇所つくる。
2. 園を貫く 3 本の廊下は、視線で周辺の風景を繋ぐ。
3. 1820mm 間隔で配置された無数の柱と梁は屋内空間に奥行きを持たせ周辺環境と緩やかに連続する。

○全体構成図



○地域の材料でつくる、肌で感じる保育園ー 1：木材

本提案では、構造材に**国産のスギ材**、床材に**地場産の三河スギ**を使用する。手先の感覚が敏感な乳幼児期に地元で取れる材の良さを手のひらと足の裏で触れることで、子どもたちに自然との関係性をより深い体感として伝える。

国産スギ材：他の樹種と比べて柔らかく、断熱性能が高く木の温もりをより感じることができる。

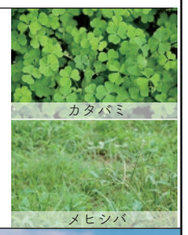
三河スギ材：普通のスギ材よりも油分が多く、艶がある。ほのかに甘い香りがするため嗅覚も刺激する。年輪が均一で木目が綺麗である。

○地域の材料でつくる、肌で感じる保育園ー 2：植栽

外部空間では、周辺に自生している**カタバミ**や**メヒシバ**をグラウンドカバーとして使用する。普段は**”雑草”**と呼ばれる類の植物だが、面の広いカタバミは子どもを優しく受け止め、高さのあるメヒシバは子どもの隠れ家になり、身近にある自然を体感できる。

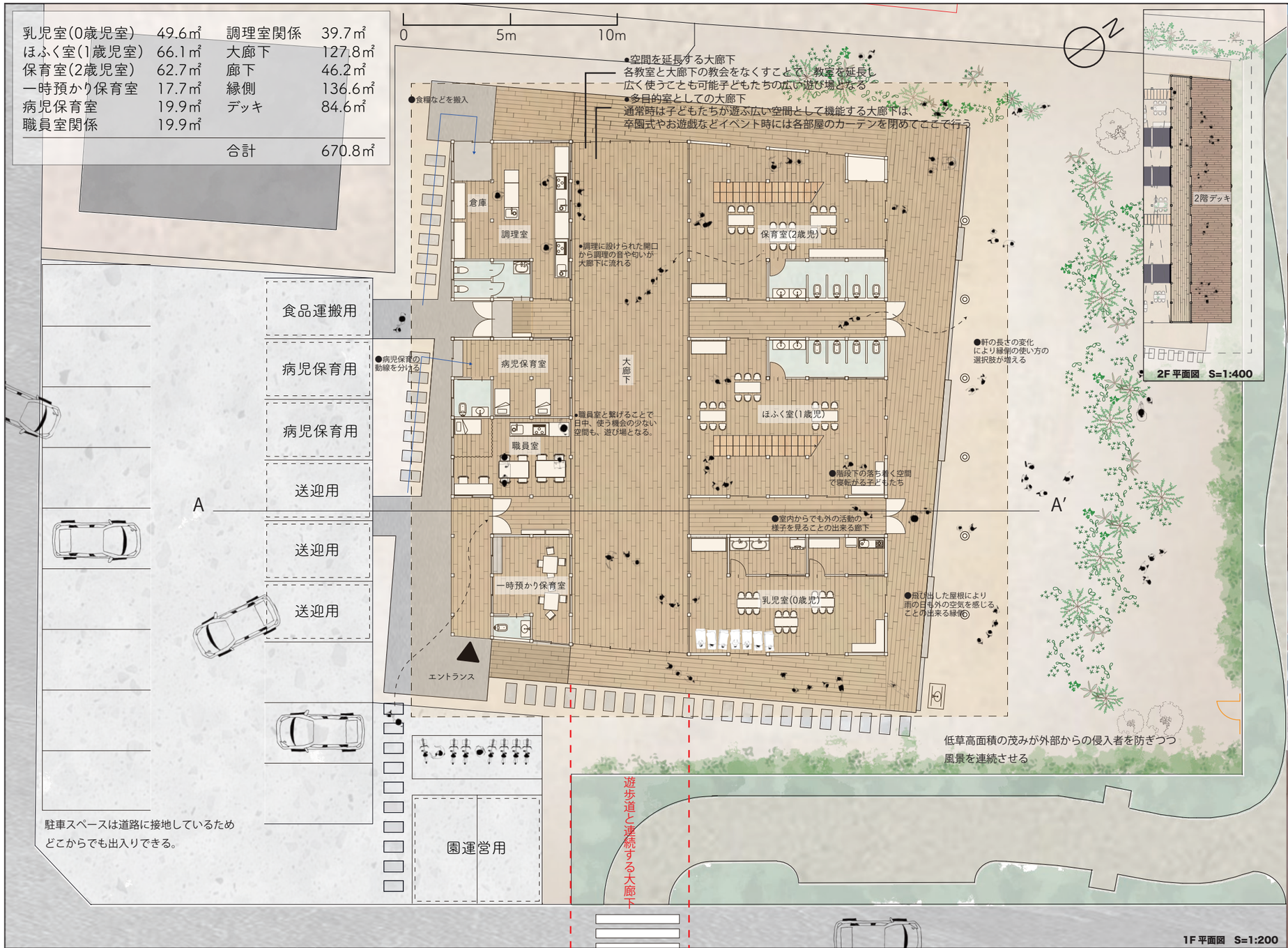
カタバミ：まだ歩き慣れていない子どもをハート型の葉が支える。一年で発芽・開花・枯れを繰り返すので月毎に外部空間の姿が変化する。

メヒシバ：薄く柔らかい楕円形の葉は、転んだ子どものクッションとなる。高さがあり、初めて見る昆虫との遭遇も起きる。



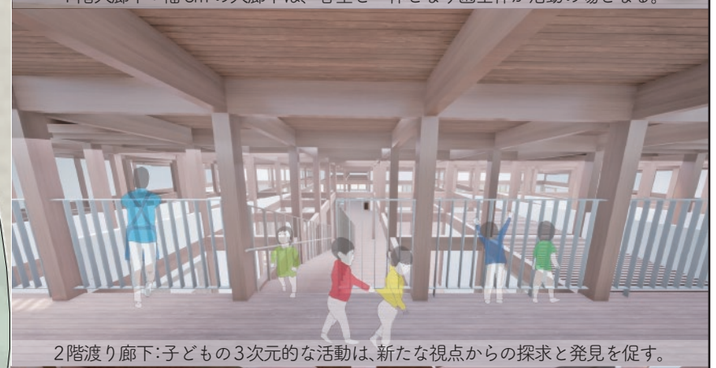
片流れの屋根が子どもを優しく守り、大廊下が風と視線を抜けさせる。

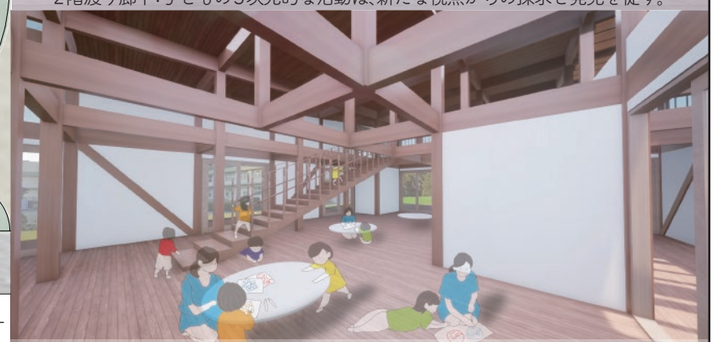
乳児室(0歳児室)	49.6㎡	調理室関係	39.7㎡
ほふく室(1歳児室)	66.1㎡	大廊下	127.8㎡
保育室(2歳児室)	62.7㎡	廊下	46.2㎡
一時預かり保育室	17.7㎡	縁側	136.6㎡
病児保育室	19.9㎡	デッキ	84.6㎡
職員室関係	19.9㎡		
		合計	670.8㎡



1階半屋外：三角形の中間領域が内外を緩やかに繋げる。

1階大廊下：幅6mの大廊下は、各室と一体となり園全体が活動の場となる。


2階渡り廊下:子どもの3次元的な活動は、新たな視点からの探求と発見を促す。

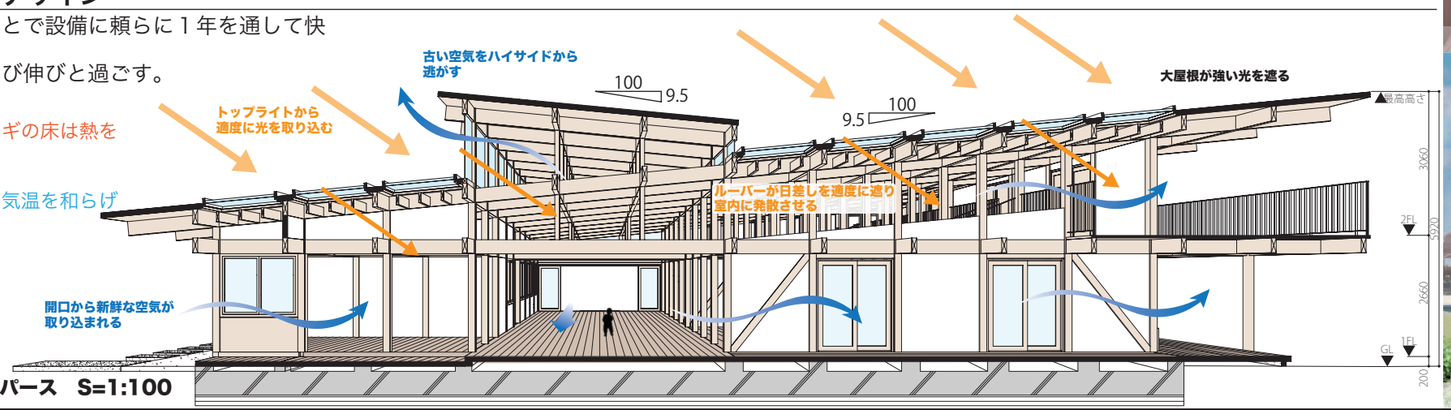

保育室：2階に続く階段は、子どもの様々な行動・創造力・興味を引き出す。

◯周辺の気候を取り込むパッシブデザイン

この土地の風や日光を適度に取り込むことで設備に頼らに1年を通して快
適な室温・明るさを保つ。
子どもたちは**自然がつくる環境**の中で伸び伸びと過ごす。

自然採光：室内を明るく照らし、暖める。スギの床は熱を
溜め、冬でも室内を動き回れる

自然通風：園内を抜ける風は夏の高い湿度と気温を和らげ
快適な活動空間を維持する。



断面パース S=1:100

屋外広場：園庭・縁側・デッキ下は様々な遊びと居場所を与える。